

交流

〈大会発表要旨〉

◆伊藤美重子 敦煌写本「目連縁起」の特質 目連救母の物語は、孟蘭盆の起源として漢字文化圏では広く伝わる。敦煌文献の中に「大目乾連冥間救母変文」と題する写本があり、その韻文と散文を交えたスタイルは、絵解きの台本とみなされている。また他に「目連縁起」と題する写本があり、その文体は所謂「変文」とは異なるものである。本発表では「目連縁起」の文体構成に着目し、同様の内容を四六句の賦体の文、六言の韻文、七言の韻文により繰り返されていること確認し、「目連縁起」は具体的な孟蘭盆の効用を効果的に聴衆に宣揚するための作品であることを指摘した。

◆和田英信 王安石と江寧 北宋の王安石（一〇二一～一〇八六）、その祖籍は江西臨川（江西省撫州市）、出生もまた同じく臨江（江西省樟樹市）の地であったが、十七歳のとき父の官に従って江寧（江

蘇省南京市）に移って以来、江寧を故郷ともみなし、やがてこの地に亡き父母を葬った。自身もまたしばしばここにすまい、熙寧九年（一〇七六）、実質的に政界より退いてのちは江寧にとどまって生をおえた。今回の発表では王安石の詩にみえる江寧をたどり、その筆下にかたちづけられた文学空間としての江寧の特質を、「半山」ということばを糸口に考えてみた。

〈例会発表要旨〉

◆角祥衣 曹植「洛神賦」の構造について 曹植「洛神賦」は古来より作者と作中の男が結び付けられて解釈されてきた。中国古典文学の伝統ともいえる解釈であるが「洛神賦」では特に、作者と作中の男が結び付けられているような書かれ方がされているのではないか。一つ目は、作中の男の設定が、現実世界の作者に寄せられている点であり、二つ目は、序文において「古人言える有り、斯の水の神、名づけて宓妃と曰う」と言い、本文においても重複表現がある点である。序文と本文が繋がり、作者と作中

の男が重なるのである。これらの現実世界と虚構世界を繋げたかのような表現によって、後世の読者に作者と作中の男が完全な等号関係にあると読ませていると考えられる。これが、洛水の女神との邂逅という完全なフィクションの世界が形成されているにも関わらず、曹植の人生の苦難を投影したのとして読解される理由の一つなのではないだろうか。

◆魯純 五四時期における人力車夫象

胡適・魯迅・郁達夫の比較を通して
— 20世紀初の中国北京城において都内の街を走り続けている人力車夫は、都市に住んでいる市民、上京したばかりの知識人、北京に来た観光者など、必ず誰かと接触できる存在であった。その一方、「自由平等」「人道主義」など近代西欧に起源する重要な概念が浸透し、ロシア十月革命（一九一七）及び第一次世界大戦を契機にして、労働者階層が台頭し、「劳工神聖」など労働者尊重のスローガンが提唱されている。その結果、都市における下層労働者の中で最も容易に接触できる人力車夫は、新文学創作の

素材となり、人力車夫が救済されるべきというイメージが築かれ、その救済策が盛んに論じられる上に、主題とする文学作品も数多く出現した。そこで、本報告では一九一八年から一九二四年までの人力車夫作品に限定し、「人力車夫表象の変遷」という観点から、胡適の「人力車夫」（一九一八）、魯迅の「人力車夫」（一九一九）、郁達夫の「薄奠」（一九二四）を取り上げ、各作品の中で人力車夫がどのように表象されたのか、各作者が車夫を通して何を訴えようとしたのか、また、人力車夫文学の中でその三作品がどのように特異であるのか、その特異性の原因と背景について考察していきたい。

◆鄭月超 郊廟歌辞の形式化に関する一考察——漢から魏晋にかけて 郊とは郊外において天地を祀る祭祀、廟とは宗廟での祖先を祀る祭祀をいう。こうした大祭のとき、用いられた歌辞が「郊廟歌辞」である（はやくに『文選』が「郊廟」の部を設け（巻二七）、劉宋・顔延之の「宋郊祀歌二首」を収める）。本発表では、宋・郭茂倩『樂府詩集』の分類に基づき、

漢代のものとして採られた作品と、魏晋のそれとの相違に主眼を置いた。郊廟歌辞はその効用ゆえ、国家の政治、政策の影響をもっとも被る文学であるといえる。例えば魏晋のほとんどの篇は、『詩経』の雅あるいは頌からそのまま借りた詩句によつて構成されていることから窺われる。しかしこれに先立つ漢代のもの、楚声、新声などを柔軟に取り入れており、作品としての豊かさ、多様性を有していた。漢から魏晋に続く郊廟歌辞の、多様から単一に向かう現象が示す文化の融合と排他のうねりについてその一端を考察した。

◆林如 从焦点理论浅析动词后助的「了」的焦点提示功能（中国語におけるアスペクトについて）「了」のアスペクトを中心に、中国語における「了」のアスペクトについては、主に「完了相」の観点から論じられることが多いが、刘勰宁（一九八八）は「実現相」の観点から述べている。本研究では、「了」のアスペクトを中心として、その分類と文法機能について考察する。先行研究では、

「実現相」という概念は広範囲にわたることが知られている。そこで、この研究では、刘勰宁（一九八八）で提唱している「実現相」の観点に基づき、「実現相」に「已然実現相」と「未然実現相」二つの分類があることを述べる。なお、中国語の「了」は「了¹」と「了²」という二つの分類があることについては、動作性や意味の影響があるため、ここでは考察しない。本研究の中の「了」は全部「了¹」である。

◆郝静 离合词的语义对表示人的成分的影响 有的双音节离合词（A₁B）中间可以插入表示人的成分（X_人），有的则不能。本文考察A₁X_人B式中的A₁B的语义对X_人的影响。大部分研究表明X_人为受事，比如赵淑华・张宝林（一九九六）、饶勤（一九九七）、王海峰（二〇一一）等。也有认为X_人是施事的研究，比如鹿琮世・李清华・大瀧幸子（一九九〇）、蔡淑美（二〇一〇）等。本文认为A₁的语义不能一概而论，A₁B的语义特点影响X_人。当A₁B是既表示心理又表示使动义的离合词时，X_人表示感事，比如「中意

等…当A Bは只表示心理不表示使动义的
离合词时、X_A表示对象、比如“生气”等…
当A B的动作行为者需要两个人、并且这
两个人是合作者的关系时、X_A表示施事、
比如“见面”等…当A B本身不需要两个
人完成行为时、通常也不需要X_A、所以
不存在A X_A B式、比如“毕业”等…也
有的A B虽然需要两个人完成、但是不能
插入X_A、比如“结婚”等…本文还总结
了每类X_A与Y_A（Y_A为与X_A不同的人
的成分、Y_A出现在包含A B的句子的主
语位置）的关系。

◆水津有理「水のなかの何か」再考—
中国古典詩における水中倒影表現 錢鍾
書は『談藝錄』のなかで元好問の詩句「看
山水底山更佳、一堆蒼煙收不起（水底
に映った山は実物の山よりもさらに美し
い。あたかもひとまとまりの青い霧が集
まろうとしても集まりきらないようだ）」
を引き、水に映った山影の表現は「詩
人の常套句」であると指摘したうえで、
「水中の倒影が実景より美しい」との感
概は多くの人の意中を看破したものと述
べた。発表者は以前、北宋・王安石の五

言古詩「散髮一扁舟」を論じるなかで水
中倒影表現の系譜について述べたが、本
発表では、「視覚の美」「揺らぎ」「心の
メタファー」としての水_Aなどを手掛かり
に唐宋の作品を中心により多くの作例を
取り上げ、本来虚像であるはずの水中の
倒影が実景より美しいと感じるのは何故
か、また詩人がそのような感慨を詠出す
るとき、彼らは水のなかに何をみている
のかについて考察した。

◆白蓮杰 耶律楚材の詩人像について
本発表では、金末モンゴル王朝期の代
表詩人耶律楚材（一一九〇—一二四四）
の、政治活動及び文学作品に照らし合わ
せ、耶律楚材の理想とする王朝像及び契
丹人としての自負について考察し、彼は
どのような詩人であったのかについて述
べた。

◆赤松美和子 『台湾を知るための60
章』刊行をめぐって 赤松美和子・若松
大祐編 『台湾を知るための60章』（明石
書店、二〇一六年八月）刊行を記念して
報告の機会をいただきました。本報告で
は、日本における台湾の概説書の歴史と

本書の刊行経緯および特徴についてお話
しました。

実は、日本において台湾の概説書は
一九九八年を最後に刊行されていませ
んでした。李登輝が総統を務めていた
一九九八年で概説書の時計は止まったま
までしたが、陳水扁（民進黨）↓馬英九
（国民党）↓蔡英文（民進黨）の三度目の
政権交代、経済の中国依存、新移民によ
る社会構造の変化、IGBTへの意識、日
本植民統治の捉え方の変容など台湾は大
きく変わり続けています。日本による植
民地統治、台湾と中華民国との絡まりと
いった歴史を直視し、29名の執筆陣によ
り、「親日台湾」という一面ではなく多
角的な視点から、現在の台湾を理解して
いただきたいという思いを込めて、『台
湾を知るための60章』を作りました。
〈博士論文要旨〉

◆直井文子 江戸後期日本漢学研究
—斎藤拙堂・頼山陽・頼春水・頼杏坪を
中心に— 私は日本漢文学という研究分
野の必要性を、その中でも江戸後期の重
要性を説き、特に副題の四名について、

その作品に表わされた文学的思惟と同時代における意義、その連関性などを論述した。この四名は世代が異なり、社会的立場は典型的と言えるが、そこに至る過程は典型から少し外れており、それぞれが文学的鑑賞に堪え得る漢詩文学作品を遺している。当時流行の「狂詩狂文」に流れなかつた彼らの儒者としての「狂」意識の検証を試み、彼らの文人意識の度合いを考察した。

比べ、文人意識を考察した。更に他の知識人の例も踏まえ、この四名が江戸後期という時代に伝統的な漢詩文という形式で、文学的水準の高い作品を創作し、儒者としての矜持を保ち、それぞれ程度は異なるが文人趣味にまで流れない文人的要素を持ち、現代の精神に通ずる、より自由な意識を持つて自己表現を果たしていたことを論証した。

本稿では、五四の文学啓蒙を紹介する上で、沈從文の作品全体と編集活動に基づき、彼の「啓蒙者」という身分に対する自覚を論じ、彼による五四文学啓蒙の継承と修正を明らかにすることで、啓蒙思想の面において軽視された沈從文作品を再考することを目的とする。さらに、彼の編集活動を見直し、今まで読者の目にふれることの少なかつた作品を紹介することも本稿の目標である。

津藩儒となつた斎藤拙堂は、文では『論語』の楚狂に近い中国古代的な意味で「狂」を使用し、詩では唐代以降の「浮かれ男」に近い意味で使用しており、意識の中では儒者の部分が趣味的文人よりも強いことを論じた。藩儒の後継ぎの道を捨てて市井の儒者となつた頼山陽は脱藩して「狂」と看做されたが、生涯を通じて「狂」字をネガティブな使い方からポジティブな使い方へと変化させ、本人の中では文人趣味的要素が強いことを論じた。

◆黄唯 沈從文の「文学啓蒙」思想について 「啓蒙」とは人々を蒙昧な状態から解放させ、正しい方向へ導くことである。一九一〇年代から一九四〇年代にかけて、激しい社会変動の中で戸惑いを感じている人々をいかに目を覚まさせ、導くかは当時の有識者のテーマとなつた。五四運動では、啓蒙の手段の一つとして、文学で国民を啓蒙する文学啓蒙が掲げられた。従来、作家の啓蒙思想をめぐる研究は、年代や思潮、党派によつて作家を分類し、論じることが多いが、「独立派」の沈從文は度外視されることが多い。

◆呉菲非 現代と文学革命時代の留学作品による異なる文化受容変遷の比較 — 郁達夫、閻真の小説を事例に 近代から現代まで、中国人留学生は中国に対して多大な影響を及ぼしてきた。その中で、文学革命時代は、中国現代文学史に対して重要な時期とされ、代表的な知識人としては、郁達夫が挙げられる。また、90年代は世紀の節目として、歴史的な時期とされ、活躍した代表的作家の一人が閻真である。いずれも留学経験者である。この二つの年代における異なつた文化受容の内容・仕方等はあまり明らかにされていない。なお閻真は日本ではあまり知

られていないが、彼の『曾在天涯』は中国の留学文学においても代表的な作品とされている。本研究は郁達夫の『沈淪』と閻真の『曾在天涯』を対象として、作品中の時代の背景と両作品の「士大夫」と「零余者」の性質の継承とその突破を踏まえて、主人公の作品中における性格の変化、恋の変化、人と人の距離の変化という視点を通じて、異なる文化受容と留学経験が作品に与えた影響を明らかにしようとした。

◆鈴木涼子 定格聯章体の敦煌歌辞について 敦煌文献、敦煌文学という言葉は、一九〇〇年に中国甘肅省の敦煌莫高窟千仏洞第十七号窟から発見された文書のうち、文学文献とみなされるものの総称である。

敦煌文献、その中でも敦煌歌辞を扱う研究は未だ十分とは言えない。敦煌歌辞の定格聯章体のうち「十二時」「五更轉」の研究は、禅学研究などを中心に近年でも幾つか散見できる。しかしながら「百歲篇」「十二月」を含む、定格聯章体に属する曲を包括した研究は、近年行

われていない。本論文では敦煌歌辞の定格聯章に関する先行研究を調査するとともに、各章において「十二時」「五更轉」「百歲篇」「十二月」の四種の鈔本を整理し、句型を分析、一部の邦訳をしたのちに、句型・内容からそれぞれの特徴をまとめ、比較研究を行った。また各曲の内容を文学的表現などから鑑みて、定格聯章に属する四種の曲の仏教の教導・教化との関連性を検討した。

◆高山恵梨華『太平広記』における嫉妬譚—嫉妬と内外と男女— 『太平広記』内の嫉妬譚は、嫉妬の熟語が使われる説話は数話しか存在せず、嫉・妬のいづれかが使われる説話が大半である。そして、多くは嫉は男性、妬は女性に使用される。これにより一見男女別にも思われるが、男女が漢字の使い分けの指標ではなく、嫉と妬は二種類の嫉妬感情である、嫉み envy と嫉妬 jealousy に対応している。では、なぜ嫉と男、妬と女は結び付けられるのか。それは、ある一面で嫉と男は外の性質、妬と女は内の性質と一致し、内外を介して嫉妬と男女は結

び付くためである。嫉と妬が生じやすい環境と、男女の住み分けの環境が一致したのである。よって、内外を介さなければ嫉妬と男女に直接的な関連性は存在しない。しかし、中国の思想には、物事を相對する二つに分ける傾向がある。男女は物事を二分化するための大きな指標であるために、表層的な情報として現れやすい。そのため、嫉・妬の使い分けが性別にあるかのように見えるのである。

◆董子華 六朝志怪に現れた道教植物観—怪異に関わる草木を中心として— 本研究は六朝志怪における草木怪異を主な研究対象にし、それらの草木怪異を再分類した上で、草木怪異と道教思想の関連性について考察し、道教における植物観を明らかにすることを目的とする。

第一章と第二章では、本研究の背景や先行研究について紹介する。第三章で、説話の中における機能によつて、六朝志怪における草木怪異を再分類してみる。第四章では、薬としての草木と道教の服食觀念の関連性について論述し、そし

て、采葉、遊仙、登山の、三者の關係を考察する。

第五章では、仙界・理想郷への道としての草木怪異と神仙思想との關係性を分析する。登山が遊仙に繋がっている原因、遊仙の説話に現われた草木の怪異性を明らかにしてみる。

第六章では、本研究の結論を簡単にまとめて、本稿では十分に論述していない問題点と今後の課題を述べる。

◆鄧翔心 現代中国語における様態補語の意味指向および「V_得N・VP」文における「得」の後ろの統語構造について 本論は、様態補語の意味指向を取り上げ、それを考察するためにまず明らかにする必要のある「V_得N・VP」文における「得」の後ろの統語構造について論じた上で、様態補語の意味指向のあり方について、意味指向の分類と各分類に見られる文型との二つの面から考察した。

「V_得N・VP」文における「得」の後ろの統語構造に関する結論は、以下の通りである。NとVPが「被陳述一陳

述」の關係である文において、N・VPの意味指向が明確である文は、N・VPが主述構造として補語となるが、一方でN・VPの意味が文中のいかなる成分も指向していない文は、VPが補語となり、Nは構造目的語となる。NとVPの間に意味關係がない文については、VPが補語となり、Nは目的語となる。

様態補語の意味指向のあり方に関する結論は、以下の通りである。様態補語の意味指向は、(一)述語動詞または形容詞を指向する場合、(二)主語を指向する場合、(三)目的語を指向する場合、との三つに分類することができる。(一)の場合は五つの文型、(二)の場合は六つの文型、(三)の場合は八つの文型がそれぞれ見られる。

◆馬場千春 虚指の「他」の文法的機能について 現代中国語の「他」は通常具体的な人物等を指して用いられる即ち実指であるが、虚指の場合がある。この両者の相違点を挙げたうえで実指を「他¹」、虚指を「他²」として明確に区別することを出発点とし、「他²」の文法的

機能について考察を行った。

まず「他²」の品詞について動詞だけでなく後続の数量とも深い關係があることが想定されること、また構造助詞「得」の類似点・相違点から、構造助詞である可能性を指摘した。さらに、「他²」の後続の数量補語に主観性が反映されており、虚量であるか実量であるかによって、文全体に与える表現効果は変化すると仮定し考察した。その結果、数量の虚実の区別及び助動詞との共起状況によって、「他²」の用法は3つに分類することができた。その分類から「他²」が自身が文の意味に与える影響は少なく、「他²」が導く数量補語及び共起する助動詞によって述語動詞の強調または非強調がなされることを説明した。

〈近況報告等〉

◆谷口真由美 『杜甫全詩訳注』に係わって 平成二八年六月から十月に『杜甫全詩訳注』（講談社学術文庫）全四冊が上梓された。先行の杜甫全詩の訳注には、『杜少陵詩集』（国民文庫刊行会、続国訳漢文大成、一九二八〜三一年。日本

図書センターより『杜甫全詩集』の復刻版あり）があるが、約一四五七首の全詩の新訳が出版されるのは約八十余年ぶりである。奇しくも杜甫生誕一三〇〇年に当たる二〇一二年に下定雅弘・松原朗両氏を編者として、二十七名の執筆者が訳注に取り組んだ。特徴としては、二つ

挙げられる。一つは清・仇兆鰲『杜詩詳註』を底本としてその解釈に基本的に準拠し、別の解釈がある場合は、補説するという姿勢である。もう一つは、詩の訳注を分担して執筆し、数名からなる班ごとに相互に原稿をチェックし、さらに他班の原稿をチェックするという体制が取られたことである。各々が力を發揮しながら、全体としての統一を取るといふ絶妙なバランスの上に為し遂げられた事業であった。本書の出版によって、杜甫の詩が従来以上に広い読者に読まれ、今なお光彩を放ち続けている詩の言葉が読者の共感を生むならば、「語人を驚かさずんば死しても休まず」と願った杜甫も、空の上で喜んでくれるのではないだろうか。

◆宮尾正樹 阪本ちづみさんを偲んで
二〇一五年四月より本学会の委員長を務めてくださったいた阪本ちづみさんが昨年九月二十八日に逝去されました。亡くなる数日前にご自宅で倒れて入院したものの、意識が戻ることなく亡くなったとのことです。

阪本さんの主な研究対象は張恨水を中心にした一九三〇～四〇年代の文学で、阪本さんが研究を本格的に開始した一九八〇年代後半においては日本においても中国においても未開拓の領域でした。阪本さんは都市論や交通史の先行研究を駆使して、この新分野の研究に取り組みました。その成果は本学会の学会報にもたびたび掲載されました。

阪本さんはその他にも、一九八〇年代以降の文学の研究と紹介や本学会をはじめとする学会活動などで活躍するかたわら、本務校の法政大学やその他の大学で中国語や中国文学の教育に熱心に取り組んでこられました。

阪本ちづみさんが亡くなって三ヶ月、あらためてご冥福をお祈りいたします。

死は突然やってくる
何の説明もなく

その死の上に秋の陽は輝きわたる
やはり何の説明もなく（谷川俊太郎）